

飛鳥京跡第157次調査

—宮北方の調査—

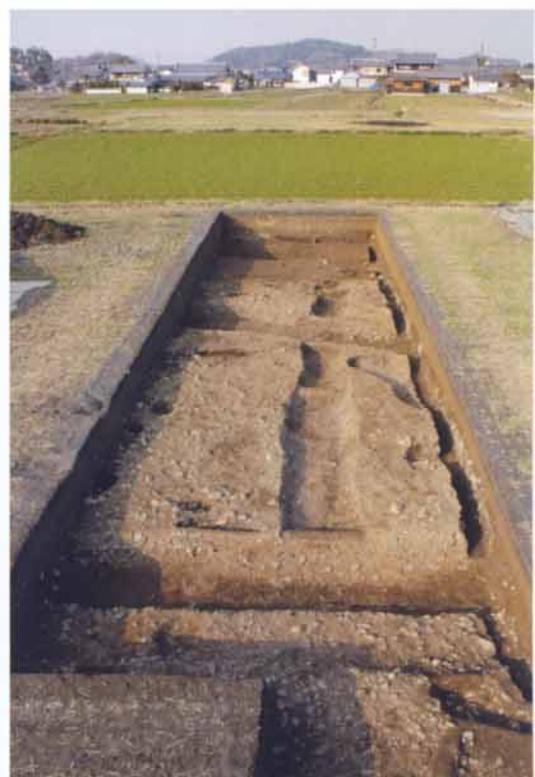
奈良県立橿原考古学研究所



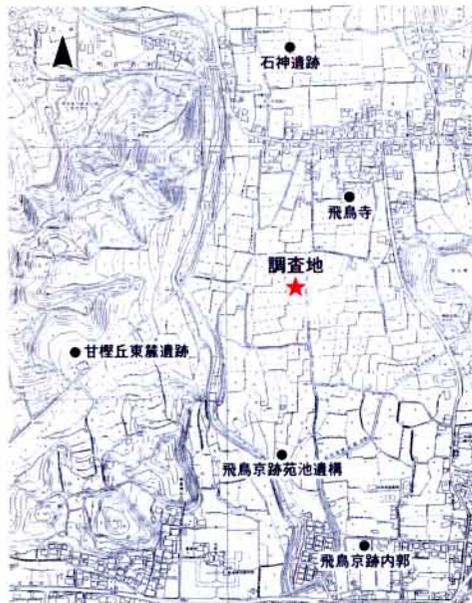
南調査区から飛鳥京跡内郭を望む(北西から)



石組溝全景(西から)



北調査区全景(南から)



調査地位置図 (S=1/15,000)

1/1,000 奈良盆地南部「橋寺」「飛鳥寺」
「豊浦」「立部」奈良文化財研究所

はじめに

飛鳥京跡は奈良県高市郡明日香村岡に所在する宮殿遺跡です。これまでの調査で3時期の遺構が検出され、これを下層からⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と呼んでいます。Ⅰ期は舒明の飛鳥岡本宮(630～)、Ⅱ期は皇極の飛鳥板蓋宮(643～)、Ⅲ期は斉明・天智の後飛鳥岡本宮(656～)、天武・持統の飛鳥浄御原宮(672～)の可能性が考えられています。

橿原考古学研究所では、2003年よりⅢ期の内郭中枢の建物配置の解明を目的として調査を実施し、正殿ともいべき大型建物や石敷広場・池状遺構を確認し、大きな成果をあげました。いっぽう外郭については、東辺となる掘立柱塀や南北石組溝は確認されていますが、内部の様子やその範囲はまだ一部しか明らかになっていません。今年度は宮の北限の位置ならびに外郭北部の状況を解明するために発掘調査を実施しました。

第157次調査の成果

今回の調査では、飛鳥時代後半の東西石組溝とその南側に取り付く南北石組溝、飛鳥時代後半までには埋没する溝、平安時代の東西溝などを検出しました。

東西石組溝は、南調査区で長さ約13m分を検出し、上面幅は約1.7m、下面幅は約1.5mです。深さは東側から中央にかけては約0.5m、西側では南北石組溝が取り付

く地点から急に深くなり、最も深いところで約0.7mを測ります。水量調整のため深くしていたと考えられます。南北石組溝は、長さ約2.3m分を検出し、幅は約0.4m、深さは0.35mです。掘り方、石組み、堆積土の状況から、両石組溝は同時期のものであったと考えられます。

北調査区では、南東から北西方向の素掘りの斜行溝を3条検出しました。もっとも南側で検出した溝は、7世紀中葉～後半の土器を多く含んだ土で埋められており、石組溝が造営される以前に廃絶しています。他の2条の溝も前者と方位を同じくしており、同時期かそれ以前のものであると考えられます。また、これらの斜行溝は、飛鳥寺南方で検出された石敷遺構とほぼ平行しており、なんらかの関わりがあるかもしれません。南端で検出した素掘りの東西溝では、黒色土器が出土し、平安時代の溝であることがわかりました。

まとめ

今回の調査成果は、東西石組溝を検出したことです。出土した土器からみて飛鳥時代後半に流れ、藤原宮の段階に廃絶したと考えられます。これまで外郭東辺・北側で確認されている石組溝の中では最大級のものであり、基幹となる排水路であったと考えられます。この東西石組溝の南側には前述の南北石組溝があり、調査地の南東約50mの地点で行われた152次調査では、南北石組溝とその西に展開する飛鳥時代後半の掘立柱塀などが確認されており、なんらかの建物施設があったとみられます。それに対して北側では、飛鳥時代後半以前に斜行溝が埋め立てられた後、飛鳥時代の明確な遺構は確認できませんでした。このように東西石組溝を境に南北の遺構の様子が異なる状況が明らかになりました。

宮の北限については、これまで飛鳥寺の南にもとめる意見があります。このような遺構の様子や位置関係からみて、今回検出した東西石組溝は、その候補となるかもしれません。今後さらに周辺地域の調査をすすめることで、この石組溝がどのような性格をもつのか解明していきたいと思います。なお、この調査は飛鳥正宮の学術調査事業にもとづくものです。

(鈴木裕明・松井一晃)

飛鳥京跡第157次調査 -宮北方の調査- 現地説明会資料

2007年2月11日

奈良県立橿原考古学研究所

〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町1番地 Tel.0744-24-1101

<http://www.kashikoken.jp/> (ホームページでも現地説明会の案内・説明内容をご覧ください)